

学生と教員で作る文理融合リベラルアーツFD公開フォーラム

文理融合リベラルアーツ科目を受講して —受講学生の意見—

「生命と環境」系列受講生

高橋 美伶 (生活科学部 人間生活学科 1 年生)

私は生活科学部人間生活学科生活社会科学講座 1 年の高橋美伶です。私は「生命と環境」系列の「大気と水」という講座を履修しました。

この授業は大気と水に関する環境問題がテーマということで、水に関する環境問題として、琵琶湖のダム問題、諫早湾の干拓問題について、大気に関する環境問題として地球温暖化問題を取り上げていました。毎回異なるゲスト講師による講演がありました。この異なるゲスト講師というのは、NPO の代表やマスコミ関係の方、農林水産省の方や研究者の方など、さまざまな方法で環境問題にアプローチしている方がいらして、それぞれの環境観についてお話ししてくださいました。この話を基に毎回コメントシートを書いて、学生一人一人の環境観を形成することが目標という授業でした。

この授業を選んだ理由は、まず私が小学生のころ話題となっていた有明海諫早湾干拓問題という問題があるのですが、この問題は今、裁判になっていて、この裁判の原告の人と被告の人が両方この授業にいらして、それぞれの主張を聞けるということがシラバスに書いてあったので、そこにまず興味を持ったからです。

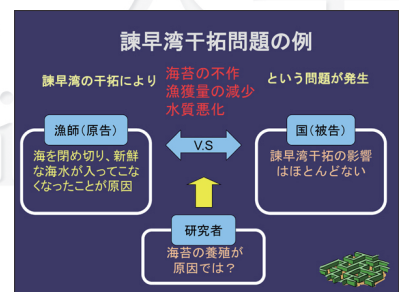
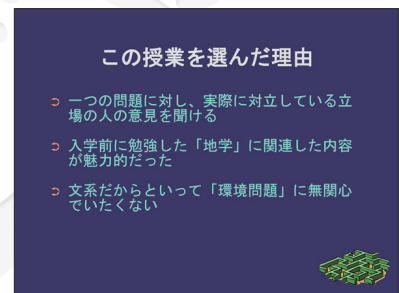
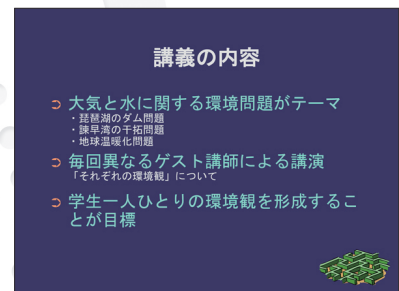
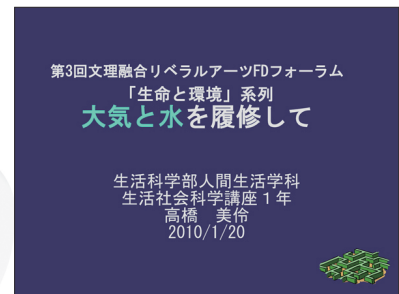
次に、私は大学に入学する前に地学の勉強をしていて、お茶大を受験する際もセンター試験で受験科目として利用したのですが、私は生活社会学講座ということで、もう入学してしまうと、専門科目でも地学に触れる機会が全くなくなってしまうので、それはとても寂しいことだと思っていたところ、この講座を発見して、何だか地学に関連していそうだと魅力的に感じました。

最後の理由は、文系だからといって環境問題に無関心でいたくないと。というのは、後期が始まる少し前だったのですが、新聞でオバマ政権がグリーンニューディール政策が、鳩山政権が温暖化ガス 25%削減を目標としているとか、そういう環境問題がニュースや新聞でたくさん紹介されていたので、文系だからといって環境問題に無関心でいいという世の中ではなくなってきているのだと思いまして、この授業を選択しました。

この授業で紹介されていて、私がこの授業を取るきっかけにもなった諫早湾干拓問題の例をご紹介します。

まず諫早湾が干拓されたのは、集中豪雨によって水田が容易に冠水してしまうというのが、有明海のそばの山の方で起きていて、当初はその排水問題の目的で対応しなければいけないということで、国が諫早湾干拓によって、調整池を造ることによって水害を防ごうということで干拓が行われました。

しかし、その諫早湾の干拓と前後して、ノリの不作、漁獲量の減少、水質悪化という問題が発生しました。そこで裁判となって、原告は主に漁師の方だったのですが、漁師の原告と農林水産省が被告となって裁判が起きています。原告側の主張は海を閉め切って、新鮮な海水が入ってこなくなったことによって、ノリの不作や漁獲量の減少、水質悪化が起きたのではないかと主張していて、国は諫早湾干拓の影響は調査によるとほとんどないとしていると主張しています。



授業では、原告側の代表として原告側の弁護士の方と、被告の代表として農林水産省の方をお話をしてくださったのですが、今度2月に研究者の方で、実はこの有明海が荒れているのは諫早湾の干拓ではなくて、ノリの養殖が原因なのではないかという新しい意見を2月にまた講演して下さるといふことで今、楽しみにしているところです。

自分なりにこの授業を受けての成果は、まず受験期に勉強した地学を勉強して、授業を理解できたということです。受験勉強はよく役に立たないと世の中で言われていて、私も「受験勉強ってそうなのかな。なぜ勉強しているのだろう」「なぜお茶大は文系なのに、理系科目を課しているのだろう」とか、いろいろ思っていたのですが、実際に受験期に勉強した科目をベースとして授業を理解できたことによって、受験勉強で得た知識というのは、教養を広める手段にもなるのだなと思いました。

また、先ほどの有明海の訴訟の例のように、一つの問題でも立場によって見方や感じ方が異なることを知りました。物事を複数の視点から考えることが重要だと思いました。また、どちらかに偏らずに、問題を解決するのは難しいと思いました。どのようなことにも利点や欠点があって、この立場の人から見て利点だと思うことも、別の立場からしてみると欠点だと思うようなことが、どこにでも現実社会にあふれているのだと感じました。どちらかの立場になって考えると、やはりそれぞれの主張は正しいのだなと思い、こっちが正しい、あっちが正しいと、どちらかに一方的に決めるのは難しいと感じました。

また、環境問題の社会への問題提起や解決は、政治家の意向や政策に左右されることを知りました。まず、干潟干拓問題やダム問題では、政治の方で干潟を干拓しようとか、海を干拓しようとか、ダムを造ろうとか、そういうことを言わなければ、まずこういう問題は起きなかったわけです。例えば干潟の干拓の問題でも、環境大臣が替わるごとに方針が変わったりして、本当に政治家が替わるといろいろ変わってしまうものなのだなと思いました。

また、アメリカのブッシュ政権の副大統領のゴア氏の映画で、「不都合な真実」というのを授業で見たのです。この「不都合な真実」という映画が作られた背景には、ブッシュ政権はアメリカの国民に環境問題なんてないと言っていたのですが、副大統領のゴアさんは、一般市民に、「いや、環境問題はあるのだ。これから取り組んでいかなければいけない問題なのだ」ということを伝えるために、「不都合な真実」という映画を作って、その映画のおかげで一般市民は「環境問題は本当にあるのだ」ということを知ったということです。政治家の影響力というのは本当に大きいものだなと思いました。


最後に、この授業を受けて私が考えたことです。まず「社会のあるところに環境問題あり」と思いました。さまざまな立場の人がいるから、利害が一致しなかったり、利害の対立が生まれて問題が生じるのだろう。そして環境問題を理解し、改善に必要なことは、まず自然の仕組みを理解することはもちろん、利害関係の均衡をはかる政治力も必要なのだと思いました。この自然の仕組みを理解しているだけではよいというわけでもなく、政治力があればよいというものだけでもなく、文系と理系の両方の視点が必要なのだと思いました。それが、このリベラルアーツのテーマでもある文理融合の視点につながるのではないかと思います。

この授業を通して、私は文理融合の視点を見つけられたとはっきり言うのは、自分でよく分からないのですが、ともかくこの視点があるということを実感できたことが、私はすごくこの授業の成果だと思います。

ご清聴ありがとうございました。

自分なりの授業の成果

- ▷ 「地学」をベースとして授業を理解できた
- ▷ 立場によって見方や感じ方が異なることを知った
 - ・物事を複数の視点から考えることが重要
 - ・どちらかに偏らずに問題を解決するのは難しい
- ▷ 環境問題の社会への問題提起や解決には政治家の意向や政策に左右されることを知った
例：干潟干拓問題、ダム問題、ゴア氏の映画「不都合な真実」



まとめ

社会のあるところに環境問題あり

様々な立場の人がいるから「問題」が生じる

環境問題を理解し改善に必要なこと

- 自然の仕組みの理解（理系）
- 利害関係の均衡をはかる政治力（文系）

文系と理系の両方の視点が必要！！

↓

文理融合の視点

